

福崎サルビア・ライオンズクラブの炊き出し奉仕  
(1995年5月号)



特集「阪神大震災」  
(1995年4月号)

阪神大震災被災地で炊き出し  
「今何ができるか」  
夢であってほしい。いつたい何が起ったのか……。しかし悪夢はすぐに現実のものとなった。明石市は神戸市と同様、激震指定地域であるが、激震中心地ほど被害は大きくなかった。明石魚住ライオンズクラブの会員たちは、自宅や会社の修復もそこそこに、炊き出しのアクティビティを開始した。1月24、29、2月5、11、19日の5回にわたり、協力を申し出てくれた地域住民を含む延べ2400人が参加、避難生活を送る被災者に、1万7000食余りのうどんやカレーライスなど、温かい食事を提供した。被害の大きさと自分たちの無力さに打ちひしがれながらのアクティビティであったが、「やらねばならない」という力を与えてくれたのは、回を重ねることに増えていった高校生や主婦などの地域ボランティアだった。同クラブは避難住民の生活環境が改善されるまで、今後も援助活動を続けていく。

阪神大震災 神戸からの緊急報告

「生きとったかあ がんばるやないか」  
4階部分がつぶれ、退避命令が出ていた神戸市中央区の三宮ビルに、2月7日1時間だけの立ち入り許可が下りた。6階に合同事務局を構えていた13クラブの会長・幹事が、決死の覚悟でビルの中へ入り、必要書類を持ち出した。互いに言葉を交わす余裕もなく、それぞれの地域

へ散っていく会長の胸には、クラブの認証状が、大事に抱えられていた。「がんばるやないか」。友を失い、家族を失った阪神地区のライオンたちが、再生へ向けて歩み始めた。

【阪神大震災続報】  
阪神大震災から1年、被災クラブの会員動向調査

昨年1月17日の阪神大震災は、多くの倒壊家屋と5千人以上の死者という未曾有の被害を出した。日本ライオンズも5人の会員と45人の会員家族の尊い命を失った。震災直後は解散クラブも出るのではと懸念されたが、一つの解散クラブも出さず復興に懸命に取り組んでいる。(1996年1月号)

阪神大震災義援金

1996年3月29日現在、335複合地区ガバナー協議会事務局の集計によると、未曾有の大被害をもたらした阪神大震災に対し、全国の各クラブから寄せられた義援金は11億8710万5553円と発表された。これに、ライオンズクラブ国際財団(LCIF)からの交付金45万9314ドル(4257万4848円) 内訳 緊急援助金2万ドル、大災害援助金15万ドル、一般援助交付金2万5000ドル及び用途指定献金交付金3万9314ドルを加えると、12億2968万401円に達した。(1996年7月号)



Q 「再建なった五つの障害者共同作業所」

9月6日、神戸市長田区の身体障害者共同作業所「シャローム」で、ウィリアム・H・ワンダー-LCIF理事長を迎えて竣工式が行われた。これで阪神大震災後、335-A、B、C、D各地区と複合地区がLCIF交付金を得て再建に取り組んできた5カ所の作業所のすべてが完成したことになる。(1996年10月号)

W 「完成したライオンズ福祉作業所「クッキー工房マミー」

阪神大震災で全壊し、5人の犠牲者を出した社団法人「神戸母子寮」その跡地にライオンズ福祉作業所「クッキー工房マミー」が完成し、9月20日、神戸市兵庫区の湊川神社境内にある楠公民館で竣工式が開催された。(中略) その窮状を知った335複合地区は、全国からの義援金の一部を拠出。公的補助金や一般の寄付と合わせて再建が決まった。(1996年11月号)



Q グリマルディ国際会長夫妻阪神大震災被災地視察  
「ライオンズの友人たちへ」

私は西宮市、芦屋市、神戸市の被災地を訪ね、これまでで最も印象に残る経験をしました。なぜ私が阪神地域に行ったのか、それは私が国際会長として、実際に自分の目で見、確認したかったからです。そして、その悲惨な光景を目の当たりにしました。(中略) そして、今こそライオンズムの力がこの地に復興をもたらすよう祈りました。この悲しみを皆さんと共に分かち合いたいと思います。(1995年4月号)

R 335-A地区阪神大震災合同慰霊祭  
(1996年11月号)

R 神戸三宮ライオンズクラブ、震災後初の例会  
(1995年6月号)

